

ヨエル書1-3章「主の日」

1A いなごの大群 1

1B 畑の荒廃 1-14

2B 主の日の前触れ 15-20

2A 恐るべき日からの救い 2

1B 無数の軍隊 1-11

2B 断食ときよめ 12-17

3B 新しい穀物とぶどう酒 18-27

4B 御霊の降り注ぎ 28-32

3A 諸国への裁き 3

1B ヨシャパテの谷 1-8

2B 諸国の戦い 9-17

3B シオンの回復 18-21

本文

ヨエル書を開いてください。前はホセア書を読み終えましたが、主がご自分に背を向けるイスラエルに、父が子に対して抱くこみ上げる愛をもって愛しておられ、そして彼らがついに、ご自身のもとに立ち返り、神が彼らの背信を癒し、不義を赦してくださるところを読みました。ヨエル書も同じです。午前礼拝で読みましたように、主に彼らが立ち返ることによって、主が災いを思い直して憐れんでくださる話が書かれています。ヨエル書はさらに、その災いが襲って来るのだよ、これから恐ろしい災いが、「主の日」と呼ばれる恐怖の日が来るのだというところから始まります。私たちが、自分をただ思い直す、自分のやり方を変えとか、そういった表面的なことではなくて、全く自分自身には救いようがなく、ただ神の憐れみにすがり、主の御名を呼び求めることについて書いてあります。主の御名を呼び求めて救われる、神の救いを見ていきます。

1A いなごの大群 1

1B 畑の荒廃 1-14

1:1 ペトエルの子ヨエルにあった主のことば。

ヨエルという人物について、ここに書かれていることの他はほとんど知られていません。彼の名前の意味は、「ヤハウエは神」あるいは「主は神」ということです。そして、ペトエルという人の息子だということですが、他には分かりません。そして、いつ預言を行なったのかという手がかりも少ないです。ある人はエリヤやエリシャが活動していた紀元前九世紀、ある人は六・七世紀、またある人は五世紀と、ばらつきがあります。けれども、どこに対して預言しているかは明らかです。ユダと

その首都エルサレムであります。

彼はまず、最近この地を襲った前代未聞の、いなごによる災害のことを預言します。この大災害によってもたらされた穀物の損失と、人々の悲しみを見ながら、主から、終わりの日に襲う恐ろしい日、「主の日」の幻を見ます。ですからヨエル書は、実に将来に関わることであり、私たち現代に生きる者たちが経験するはずの差し迫った危機について語ります。これからの世界がどうなるのか、私たちはここで知ることができます。そしてその大変な時代を先に控えていることを知ります。イナゴのような襲来という形でなくとも、突如とした破壊が襲って来るとあります。ゆえに、私たちが心を引き締め、神の前で悔い改める心を持っていることが大切だということです。

1:2 長老たちよ。これを聞け。この地に住む者もみな、耳を貸せ。このようなことがあなたがたの時代に、また、あなたがたの先祖の時代にあったろうか。1:3 これをあなたがたの子どもたちに伝え、子どもたちはその子どもたちに、その子どもたちは後の世代に伝えよ。

これから起こることは、前代未聞のことであることを前もって告げています。長老たちよ、と言って、これを公の預言としなさい、としています。そして代々語り継ぐべきものなのだ、と言っています。ちょうど、私たちが間もなく迎える原爆投下の日(8月6日広島、9日長崎)のようなものです。

1:4 かみつくいながが残した物は、いなごが食い、いなごが残した物は、ばったが食い、ばったが残した物は、食い荒らすいなごが食った。

イナゴによる災いです。ここに書かれていることが、四重の徹底的な食い荒らしであることが分かります。同じイナゴなのですが、実はヘブル語ではそれぞれ別の単語が使われています。「ガザムが残した物は、アルベが食い、アルベが残した物は、イェルクが食い、イェルクが残した物はハシームが食った。」というように書いてあります。私たちが米について、稲、米、ご飯とか、いろいろ名前が変わりますね。同じいなごでも、群れを成しているのか、どのような動きをするのか、またちょっと違った種類のバッタであったり、そうやって徹底的に、食い荒らしていくことをここで言い表しています。

覚えていますが、イナゴの災いは神による典型的な災いでありました。主が、エジプトを打つ時に雹の災いの次に下されました。そして、モーセが説教を行なった時に、彼らが約束の地で主に聞き従わなければ、イナゴの災いが来ることを預言しました(申命 28:38-39)。そしてソロモンも、神の宮を奉献する時に、イナゴの災いについて祈ったのです。「1列王 8:37-39 もし、この地に、ききんが起り、疫病や立ち枯れや、黒穂病、いなごや油虫が発生した場合、また、敵がこの地の町々を攻め困んだ場合、どんなわざわい、どんな病気の場合にも、だれでも、あなたの民イスラエルがおのの自分の心の悩みを知り、この宮に向かって両手を差し伸べて祈るとき、どのような

祈り、願いも、あなたご自身が、あなたの御住いの所である天で聞いて、赦し、またかなえてください。」ソロモンのこの祈りを、まさに行なえという呼びかけが、ヨエルの預言であります。

1:5 酔っぱらいよ。目をさまして、泣け。すべてぶどう酒を飲む者よ。泣きわめけ。甘いぶどう酒があなたがたの口から断たれたからだ。

まず、いなごによる災いによって被害を受けるのは、「酔っぱらい」です。いなごによって、ぶどう園が徹底的に荒らされ、お酒なしには生きていけない人が泣き悲しみます。「目をさまして、泣け。」と呼びかけています。これは酔いから覚めよという意味であり、霊的にも目覚めなさいという意味合いがあります。「1テサロニケ 5:6-7 ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。」

1:6 一つの国民がわたしの国に攻め上った。力強く、数えきれない国民だ。その歯は雄獅子の歯、それには雄獅子のきばがある。1:7 それはわたしのぶどうの木を荒れすたれさせ、わたしのいちじくの木を引き裂き、これをまる裸に引きむいて投げ倒し、その枝々を白くした。

ヨエルの預言の特徴は、三つの出来事が重なるようにして出て来ることです。一つは、イナゴによる襲来です。そしてもう一つは、そのイナゴによる襲来のように、一つの国がイスラエルの国に攻め上って来る、その恐ろしい姿を示しています。アッシリヤでしょうか、バビロンでしょうか、どちらも含まれると思います。さらに終わりの日、主の日に来る軍隊も含まれることでしょう。けれども、さらにもう一つの出来事があります。それは2章にあります。軍隊といっても人間ではなく、悪霊どもによるものです。信じがたいことですが、それは黙示録9章に書いてあります。

そして、ぶどうの木といちじくの木という、イスラエルの代表的な木が白くされるとのことですが、これは文字通りの被害でもありましたが、それ以上に、象徴的な意味が含まれているでしょう。ぶどうの木、いちじくの木、どちらもイスラエルを比喩的に指していることが多いからです。

1:8 若い時の夫のために、荒布をまとったおとめのように、泣き悲しめ。1:9 穀物のささげ物と注ぎのぶどう酒は主の宮から断たれ、主に仕える祭司たちは喪に服する。

イナゴによる災い、また軍隊による災いは、作物が取れなくなるので、主の宮にその被害が及びます。穀物の捧げ物を祭司たちはしますし、またぶどう酒による注ぎの捧げ物もしますが、それができなくなります。つまり、イスラエルの地に襲って来たこれらの災いが、直接、主の宮の中に影響を与え、それで祭司たちが嘆き悲しむということでもあります。その悲しみが、これから結婚しようとする時に、婚約相手を失った乙女のような悲しみに喩えています。教会もこのような存在です、世界で起こっていること、周囲で起こっていることについて、私たちは他人事ではなく、そのまま教会

にも影響が押し寄せて来て、私たちは主に対して叫び求めるのです。

1:10 畑は荒らされ、地も喪に服する。これは穀物が荒らされ、新しいぶどう酒も干上がり、油もかれてしまうからだ。1:11 農夫たちよ。恥を見よ。ぶどう作りたちよ。泣きわめけ。小麦と大麦のために。畑の刈り入れがなくなったからだ。1:12 ぶどうの木は枯れ、いちじくの木はしおれ、ざくろ、なつめやし、りんご、あらゆる野の木々は枯れた。人の子らから喜びが消えうせた。

人々に喜びをもたらしていた、これらの作物の収穫が一気になくなってしまいます。私たちにも、心に喜びをもたらす祝福がありますね。それが一気に削がれてしまうことを考えてみてください。

1:13 祭司たちよ。荒布をまとっていたみ悲しめ。祭壇に仕える者たちよ。泣きわめけ。神に仕える者たちよ。宮に行き、荒布をまとって夜を過ごせ。穀物のささげ物も注ぎのぶどう酒もあなたがたの神の宮から退けられたからだ。1:14 断食の布告をし、きよめの集会のふれを出せ。長老たちとこの国に住むすべての者を、あなたがたの神、主の宮に集め、主に向かって叫べ。

悔い改めへの呼びかけです。祭司らを初めとして、神の宮から悲しみと嘆きを言い表しなさい、それから長老たちが、国に住むすべての者たちに断食の布告をしなさい、主の宮に向かって叫ぶのだ、ということです。神と神の宮を中心とした、祈りの集会を持ちなさいということです。

2B 主の日の前触れ 15-20

1:15 ああ、その日よ。主の日は近い。全能者からの破壊のように、その日が来る。1:16 私たちの目の前で食物が断たれたではないか。私たちの神の宮から喜びも楽しみも消えうせたではないか。1:17 穀物の種は土くれの下に干からび、倉は荒れすたれ、穴倉はこわされた。穀物がしなびたからだ。1:18 ああ、なんと、家畜がうめいていることよ。牛の群れはさまよう。それに牧場がないからだ。羊の群れも滅びる。

穀物の種が干からびている、倉が荒れ廃れている、家畜が呻いているという幻を見ているのですが、このような情景が「主の日」と重ね合わせてみています。これが、預言者たちによって、何度も何度も予告されている、主の定められた終わりの日であります(イザヤ書 13:6-10)。これが、旧約聖書の昔の話でないことが、新約聖書での引用で明らかです。「1テサロニケ 5:2-3 主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が『平和だ。安全だ。』と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。」黙示録は、主の日そのものの預言です。

ですから、ヨエルがイナゴの災いの幻を見て、それから軍隊の幻を見て、それで主の日の幻をみ

たように、私たちにもこれから、将来の主の日の災いを感じさせるような出来事が次第に起こります。最近も、夏なのに東京にかなり大きな雹が降って、山手線の駅の屋根を壊してしまいましたね。黙示録には、大きな雹が激しく降る災いが主の日に起こる事が書かれています(16:21)。

1:19 主よ。私はあなたに呼び求めます。火が荒野の牧草地を焼き尽くし、炎が野のすべての木をなめ尽くしました。1:20 野の獣も、あなたにあえぎ求めています。水の流れがかれ、火が荒野の牧草地を焼き尽くしたからです。

ヨエルは、イスラエルの民に預言していましたが、今、主のほうに自分自身が向いて、主に訴えて、呼び求めています。日照りによってでしょうか、空気が乾燥して、火事が起こり木や草が嘗め尽くされています。水も涸れています。ペテロ第二 3 章には、ノアの時代は水に拠る裁きだが、これからは火によって焼かれると書いてあります(7 節)。

2A 恐るべき日からの救い 2

1B 無数の軍隊 1-11

2:1 シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声をあげよ。この地に住むすべての者は、わななけ。主の日が来るからだ。その日は近い。

ここから本格的な、主の日の預言です。シオンから角笛を吹き鳴らすので、シオンにおられる主ご自身からのラツパの音です。民数記 10 章に、ラツパを吹き鳴らすことについての命令があります。イスラエルの宿営を出発させる時など、人々を呼び集めたり、召集したりするときに吹きますが、「あなたがたの国で、あなたがたを襲う侵略者との戦いに出る場合は、ラツパを短く吹き鳴らす。(9 節)」とあります。これから主が、ご自分の住まわれるシオンから世界に向けて、この侵略者が来ることを告げておられるのです。

2:2 やみと、暗黒の日。雲と、暗やみの日。山々に広がる暁の光のように数多く強い民。このようなことは昔から起こったことがなく、これから後の代々の時代にも再び起こらない。2:3 彼らの前では、火が焼き尽くし、彼らのうしろでは、炎がなめ尽くす。彼らの来る前には、この国はエデンの園のようであるが、彼らの去ったあとでは、荒れ果てた荒野となる。これからのがれるものは一つもない。

「やみと、暗黒の日。雲と、暗やみの日。」とあります。これが主の日における特徴です。他の預言書にも主の日がこのようなものであるという描写があります。ですから、キリストが十字架に付けられた時に、天が暗くなったというのは彼らにとっては、主の日を思い起こさせるような出来事、罪が裁かれている出来事であると見なしたに違いありません。

そして、先ほどは、いなごが一つの国民、数え切れない国民として形容されていましたが、終わりの日には実際に無数の軍隊がこのようにして世界を襲います。「山々に広がる暁の光」とありますが、山から朝日が昇るときに、一気に山全体に光が広がっていきますね。同じように、この軍隊は見る見るうちに広がって、そして一気にすべてを覆うのです。そして、彼らからは「火」が出ています。それゆえ、草という草は全く焼き尽くされます。

2:4 その有様は馬のようで、軍馬のように、駆け巡る。2:5 さながら戦車のきしるよう、彼らは山々の頂をとびはねる。それは刈り株を焼き尽くす火の炎の音のよう、戦いの備えをした強い民のようである。2:6 その前で国々の民はもたえ苦しみ、みな顔は青ざめる。2:7 それは勇士のように走り、戦士のように城壁をよじのぼる。それぞれ自分の道を進み、進路を乱さない。2:8 互いに押し合わず、めいめい自分の大路を進んで行く。投げ槍がふりかかっても、止まらない。2:9 それは町を襲い、城壁の上を走り、家々によじのぼり、盗人のように窓からはいり込む。2:10 その面前で地は震い、天は揺れる。太陽も月も暗くなり、星もその光を失う。2:11 主は、ご自身の軍勢の先頭に立って声をあげられる。その隊の数は非常に多く、主の命令を行なう者は力強い。主の日は偉大で、非常に恐ろしい。だれがこの日に耐えられよう。

こんなおぞましい姿を、私たちは想像できるでしょうか。一糸乱れず、どんな妨害が入ってもびくともせず、前進し続けます。そして、大雑把に荒らしていくのではなく、家々の中にまで入ってきます。3節には、イスラエルの国が荒らされることが書かれていましたが、ここでは6節にあるように「国々」に対するものです。イスラエル国内ではなく、世界中で起こることです。黙示録9章に、ヨエルが預言したことをヨハネが見ている場面があります。この招待はまさに「悪霊」です。1節から読みます。

第五の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、私は一つの星が天から地上に落ちるのを見た。その星には底知れぬ穴を開くかぎが与えられた。その星が、底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空も、この穴の煙によって暗くなった。その煙の中から、いなごが地上に出て来た。彼らには、地のさそりの持つような力が与えられた。そして彼らは、地の草やすべての青草や、すべての木には害を加えないで、ただ、額に神の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡された。しかし、人間を殺すことは許されず、ただ五か月の間苦しめることだけが許された。その与えた苦痛は、さそりが人を刺したときのような苦痛であった。その期間には、人々は死を求めるが、どうしても見いだせず、死を願うが、死が彼らから逃げて行くのである。そのいなごの形は、出陣の用意の整った馬に似ていた。頭に金の冠のようなものを着け、顔は人間の顔のようであった。また女の髪のような毛があり、歯は、ししの歯のようであった。また、鉄の胸当てのような胸当てを着け、その翼の音は、多くの馬に引かれた戦車が、戦いに馳せつけるときの響きのようであった。そのうえ彼らは、さそりのような尾と針とを持っており、尾には、五か月間人間に害を加える力があつた。彼らは、底知れぬ所

の御使いを王にいただいている。彼の名はヘブル語でアバドンといい、ギリシヤ語でアポリュオンという。(1-11 節)

この軍隊の出所はアバドン、アポリュオン、つまり悪魔です。そしてその手下どもの悪霊が底知れぬ所から出てきて、世界の人々に苦痛を与えているのです。そしてこれは悪霊どもが行なっていることなのですが、ヨエル書 2 章 11 節を見ると、神ご自身が先頭に立っておられる、つまり、神の主権の中で起こっていることなのです。

なぜ神がここまで行なわれるのか？こういったら語弊があるかもしれませんが、「生きているうちに、地上において既に地獄がどのようなものを少し知らせている」ということでしょう。地獄は、元々、悪魔とその手下どものために造られました。そして人々は福音を拒み、ゆえに悪魔に偽りに従って、それで自ら地獄に行くことを選んでしまいます。今、限定的であつてもそこがどういふところなのかを、主が悪霊どもを解き放つことによって知らせて、それで何とかして悔い改めへ導かれてほしいと願われているのではないかと、思います。そこで次の節を見てください。

2B 断食ときよめ 12-17

2:12 「しかし、今、…主の御告げ。…心を尽くし、断食と、涙と、嘆きとをもって、わたしに立ち返れ。」2:13 あなたがたの着物ではなく、あなたがたの心を引き裂け。あなたがたの神、主に立ち返れ。主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵み豊かで、わざわざを思い直してくださるからだ。2:14 主が思い直して、あわれみ、そのあとに祝福を残し、また、あなたがたの神、主への穀物のささげ物と注ぎのぶどう酒とを残してくださらないとだれが知ろう。

午前礼拝でお話した通りです。初めの接続詞、「しかし、今」というところが大事です。このには、「今からでも遅くない」という意味合いがあるそうなのです。主は、ここにあるように怒るに遅い方、つまり忍耐しておられる方なのです、途方もなく待つておられる方です。今からでも遅くないのです。そして私たちがなぜ、悔い改めから遠ざかってしまうのでしょうか？それは、神の慈しみを知らないからです。自分が罪人であることを認めれば、怒られてしまうのではないかと？自分に不利になるのではないかと？という恐れが生じて、それで退くのです。これは正反対ですね、退けば滅びるのです。神の慈しみを信じるからこそ、私たちは初めて悔い改めをする勇気が与えられます。恐れとプライドは表裏一体です。

そして、主の裁きは宿命的、決定的なものではありません。主が断定的に、「わたしは必ずこれこれをする」と言われても、悪人が滅びることを神は喜ばれておらず、悔い改めてかえって生きることを願っておられます。ですから、いつでも神は思い直してくださるのです。憐れみが裁きに勝つのです。あの放蕩息子にあるような、へりくだり、勇気を持ってください。

2:15 シオンで角笛を吹き鳴らせ。断食の布告をし、きよめの集会のふれを出せ。2:16 民を集め、集会を召集せよ。老人たちを集め、幼子、乳飲み子も寄せ集めよ。花婿を寝室から、花嫁を自分の部屋から呼び出せ。

再び、「角笛」を吹き鳴らす集会を呼びかけておられます。民数記 10 章には、戦いに召集する時にラッパを吹き鳴らすだけでなく、例祭の時にも吹き鳴らしなさいという命令があります。ここでは、断食と清めの集会のための召集です。そしてこれは全員参加です。乳飲み子まで寄せ集めよ、と命じられます。そして新婚夫婦も呼び出せと命じられています。戦争の時には、挙国一致という言葉があります。普段は与党野党で言い争っていても、有事には違いを横において、一つになって戦うということです。そして世界大戦において、総力戦という言葉もできました。戦争が兵隊だけでなく、一般市民も戦うという意味です。これはとても惨いことですが、今、一人一人が一致して、自分自身との戦いをする危機的な状況だということです。

2:17 主に仕える祭司たちは、神殿の玄関の間と祭壇との間で、泣いて言え。「主よ。あなたの民をあわれんでください。あなたのゆずりの地を、諸国の民のそしりとしたり、物笑いの種としたりしないでください。国々の民の間に、『彼らの神はどこにいるのか。』と言わせておいてよいのでしょうか。」

悔い改めと憐れみを請う祈りをささげていますが、祈っている場所を見てください。「神殿の玄関の間と祭壇の間」です。祭壇とその奥にある聖所において奉仕するのが祭司です。しかし、祭司はそこに自分たちが参上する価値もない、ということを知っているのです。似たような話が、イエス様の例えにありましたね。パリサイ人と取税人の祈りです。パリサイ人は宮の中で祈りましたが、罪人は遠くに離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて祈りました(ルカ 18:13)。全く自分は神の前に立つ資格などない、という認識です。

そして、「ゆずりの地を、諸国の民のそしりとしたり、物笑いの種としたりしないでください。」と祈っています。諸国の民がこの地を分割していくことが後で書かれています。そして最大のそしりは、「彼らの神はどこにいるのか。」であります。このことについて神は憤りをもって答えられます。主がいかにか、ここにご自身がおられるのかを力をもって、諸国の民に示されます。私たちのうけるそしりも、「主は生きているのか？ 信者さんたちの間に生きているのか？」というそしりでしょう。

3B 新しい穀物とぶどう酒 18-27

2:18 主はご自分の地をねたむほど愛し、ご自分の民をあわれまれた。

この「ねたむほど愛し」という言葉を覚えてください。神の愛は、何をやってもいいんだよというよなものではありません。夫婦が一对一であるように、ただ主なる神を愛する関係でありたいと願

っておられます。

2:19 主は民に答えて仰せられた。「今、わたしは穀物と新しいぶどう酒と油とをあなたがたに送る。あなたがたは、それで満足する。わたしは、二度とあなたがたを、諸国の民の間で、そしりとしめない。
2:20 わたしは北から来るものを、あなたがたから遠ざけ、それを荒廃した砂漠の地へ追いやり、その前衛を東の海に、その後衛を西の海に追いやる。その悪臭が立ち上り、その腐ったにおいが立ち上る。主が大いなることをしたからだ。」

主が彼らを約束の地に帰還させてくださいます。そしてその地を再び豊かにしてくださいます。そして、たとえ国々が彼らを襲ってこようと彼らを打ち滅ぼしてくださいます。「北から来るもの」とありますが、アッシリヤもバビロンも北からやって来ました。そして、エゼキエル書 38 章にあるのはマゴグの地のゴグです。そして、ダニエル書 12 章にあるのは、世界に荒廃をもたらすところの忌むべき者、つまり反キリストがいます。どちらなのかは分かりませんが、いずれにしても北からイスラエルの地を滅ぼそうとします。

その時に主が超自然的にご介入されます。イスラエルの地図を思い出してください。北から軍隊が洪水のように押し寄せます。けれども、イスラエルに近づいた時にその軍を両脇に押しやられます。そうすれば、西の海である地中海に押しやられて、溺れ死ぬ人々が出てきます。そして東の海、つまり死海にも押しやられて死ぬ人々が出てきます。そしてかろうじて海の中に落ちなかった人々も、ユダとエルサレムには入ることはできず、南の砂漠地方ネゲブに来るだけです。そしてそこで倒れた死体はそこに積み上げられ、悪臭を放ちます。

2:21 地よ。恐れるな。楽しみ喜べ。主が大いなることをされたからだ。2:22 野の獣たちよ。恐れるな。荒野の牧草はもえ出る。木はその実をみのらせ、いちじくの木と、ぶどうの木とは豊かにみのる。2:23 シオンの子らよ。あなたがたの神、主にあつて、楽しみ喜べ。主は、あなたがたを義とするために、初めの雨を賜わり、大雨を降らせ、前のように、初めの雨と後の雨とを降らせてくださるからだ。

この、主の大いなることの後、自然界は神の理想の姿に回復します。アダムが罪を犯した為に呪われたこの地が、またイスラエルの罪のために敵に踏み荒らされたこの地が、元に戻ります。そしてシオン、つまりエルサレムの町にいる人々は、主から義を与えられ、喜び楽しんでいきます。彼らが物理的に救われただけでなく、霊的に救われたのです。ここにもあるとおり、義とするのは主ご自身であり、彼らが行なった義によるものではありません。

そして主は、「初めの雨」と「後の雨」に言及しておられます。これがイスラエルの地に収穫をもたらすところの季節的な雨です。新共同訳では「秋の雨」と「春の雨」と訳されていますが、秋の収穫

が終わった後に、土地に雨が降り、その水を含んだ土に種を蒔くことができます。これが「秋の雨」あるいは「初めの雨」です。そして作物が育ち、三月、四月ごろに再び大きな雨が降ります。この雨によって、作物は勢いずき、一気に花を咲かせ、実を結ばせます。これが「春の雨」あるいは「後の雨」です。そして五月からイスラエルは乾季に入ります。

2:24 打ち場は穀物で満ち、石がめは新しいぶどう酒と油とであふれる。2:25 いなご、ばった、食い荒らすいなご、かみつくいなご、わたしがあなたがたの間に送った大軍勢が、食い尽くした年々を、わたしはあなたがたに償おう。2:26 あなたがたは飽きるほど食べて満足し、あなたがたに不思議なことをしてくださったあなたがたの神、主の名をほめたたえよう。わたしの民は永遠に恥を見ることはない。2:27 あなたがたは、イスラエルの真中にわたしがいることを知り、わたしがあなたがたの神、主であり、ほかにはないことを知る。わたしの民は永遠に恥を見ることはない。

主は、私たちが罪で失ったものを恵みによって十分に償うことのおできになる方です。大軍勢が食い尽くした年々を償うことのおできになる方です。永遠に恥を見ることはない、と二度も繰り返しておられます。主がこれだけ確証しておられるのですから、永遠に恥を見ることはないのです。これが「永遠の救い」あるいは「永遠の保証」と呼ばれるものです。そして、先ほどのあざけりであった「あなたがたの中に神はいるのか？」というもの、ここで主が答えておられます、「イスラエルの真中にわたしがいることを知る」のです。

4B 御霊の降り注ぎ 28-32

そして、私たち教会にとって最も大切な出来事、聖霊が降ることの預言があります。

2:28 その後、わたしは、わたしの霊をすべての人に注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、年寄りも夢を見、若い男は幻を見る。2:29 その日、わたしは、しもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。

ここで主が強調されているのは、「すべての人」です。旧約時代、主は、ご自分が選ばれた預言者、祭司、義人、また聖徒にのみ御霊を注がれました。イスラエルの民が荒野で、マナばかり食べて飽き飽きした、肉がほしいと文句を言ったとき、モーセは「なぜ、このすべての民の重荷を私に負わされるのでしょうか。(民数 11:11)」と言われました。彼は疲れ果てていました。それで主は、長老七十人に、モーセに与えられているご自分の霊を置かれました。そうしたら長老たちが預言を行いました。このことに腹を立てたヨシュアに対して、モーセがこう言いました。「あなたは私のためを思ってねたみを起こしているのか。主の民がみな、預言者となればよいのに。主が彼らの上にご自分の霊を与えられるとよいのに。(同 29 節)」このモーセの願いの答えが、この約束です。

教会が誕生したのは、まさにこのことが起こったからだと言ったのがあのペテロです。彼らが屋

上の中で祈っている時に、五旬節の満ちた日に、ご聖霊が火の舌のような形で降りてこられて、彼らのご聖霊に満たされて、外国の言葉で神を賛美しはじめました。そして世界中から来ていたユダヤ人の巡礼者らが、自分の地方の言葉で彼らが神を賛美しているのを見て、驚き怪しみました。ある者が「ぶどう酒に酔っているのだ。」と言ったので、その言葉を使ってペテロは説教を始めたのです。「今は朝の九時ですから、あなたがたの思っているようにこの人たちは酔っているではありません。これは、預言者ヨエルによって語られた事です。『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。その日、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。(使徒 2:15-18)』そして、彼はヨエル書の預言を続けて引用して、次から読む 30 節から 32 節までの言葉を読みませす。それは大患難時代についての預言です。

このように、いかにヨエルの預言が私たちに関わって来るかが分るでしょう。主は終わりの日にイスラエルの民に注がれるその御霊を注がれて、実に異邦人に対しても、この約束を与えられ、今に至っています。私たちが熱心に、聖霊の力を求めるべきです。ところで先に、初めの雨と後の雨が降るという約束がありました。そこで、初めの雨が教会が誕生した時に降り、後の雨が教会が完成する、つまり携挙される前に降ると期待と信仰を持っている人々がいます。それが正しい解釈であるか分かりませんが、けれども主が再臨される前に、世界に福音を宣べ伝えるのを完成されるので、御霊の働きが顕著になることは確かです。

2:30 わたしは天と地に、不思議なしるしを現わす。血と火と煙の柱である。2:31 主の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。2:32 しかし、主の名を呼ぶ者はみな救われる。主が仰せられたように、シオンの山、エルサレムに、のがれる者があるからだ。その生き残った者のうちに、主が呼ばれる者がいる。

大患難の時に、イスラエルが主の名を呼び求めます。けれども、この原則を取って、パウロは全ての人、異邦人も含めて全ての人が無差別に、主の御名を求めたら救われることを話しました。「ローマ 10:12-13 ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。」そしてこの文脈の中では、シオンにいる人々、イスラエルの残りの人々に対しては、大患難において御霊が注がれるという約束が与えられています。ゼカリヤも同じことを預言しています。「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分が突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。(12:10)」そして「その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。(13:1)」とあります。

3A 諸国への裁き 3

3 章においては、主がご自分の地を妬まれて、その地を分け取った異邦の諸国に対する裁きが書いてあります。

1B ヨシャパテの谷 1-8

3:1 見よ。わたしがユダとエルサレムの捕われ人を返す、その日、その時、3:2 わたしはすべての国民を集め、彼らをヨシャパテの谷に連れ下り、その所で、彼らがわたしの民、わたしのゆずりの地イスラエルにしたことで彼らをさばく。彼らはわたしの民を諸国の民の間に散らし、わたしの地を自分たちの間で分け取ったからだ。3:3 彼らはわたしの民をくじ引きにし、子どもを遊女のために与え、酒のために少女を売って飲んだ。

主がエルサレムに戻ってこられた後に行なわれるのは、この諸国への裁きです。「ヨシャパテの谷」というのは、オリーブ山と神殿の丘の間にあるケデロン谷の谷のことです。そこに諸国の民を集め、そしてイスラエル人とまたその地に対して行なったことに対して、裁きを行なわれます。

この同じことを話されたのが、イエス様のオリーブ山の講話です。世の終わりのことを話し、それからいろいろな例えによって、目をさまして用意しなさいと説き、それから最後にこう言われました。「人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。(マタイ 25:31-33)」ハルマゲドンの戦いの中でおも生き残っているわずかな人々です。生き残っているからと言って、そのまま神の国に入れるわけではありません。それでイエス様が裁きを行なわれます。

この右にいる者たちに対して、主はこう言われます。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。(40 節)」ここでイエス様が言われた「わたしの兄弟たち」というのは、このヨエル書によると肉による兄弟であるユダヤ人たちです。イスラエルの地を荒らし、自分たちの思うままに分け合い、そしてユダヤ人の娘を商品のように売り買いしている異邦人に対して、主は地獄に行くことを宣言されます。そして命を賭けて、彼らをかきまい、助け、食事を与えた者たちに対しては御国の中に入れます。

イスラエルの地について、今も、分割という圧力がかかっていますね。終わりの日には、その圧力がますます強くなって、それで分け合うようになってしまうでしょう。

3:4 ツロとシドンよ。おまえたちは、わたしに何をしようとするのか。ペリシテの全地域よ。おまえたちはわたしに報復しようとするのか。もしおまえたちがわたしに報復するなら、わたしはただちに、

おまえたちの報いを、おまえたちの頭上に返す。3:5 おまえたちはわたしの銀と金とを奪い、わたしのすばらしい宝としている物をおまえたちの宮へ運んで行き、3:6 しかも、ユダの人々とエルサレムの人々を、ギリシヤ人に売って、彼らの国から遠く離れさせたからだ。3:7 見よ。わたしは、おまえたちが彼らを売ったその所から、彼らと呼ばひ戻して、おまえたちの報いを、おまえたちの頭上に返し、3:8 おまえたちの息子、娘たちを、ユダの人々に売り渡そう。彼らはこれを、遠くの民、シェバ人に売る、と主は仰せられる。

イスラエルを我が物にした異邦人として、ツロとシドン、そしてペリシテが挙げられています。前者は今のレバノンで、後者はガザ地区です。ここを読むと、昔も今も変わらないことをしていると思います。レバノンには、イスラム教シーア派原理主義の、ヒズボラが、ガザ地区にはスンニ派原理主義のハマスがいます。そして、主は彼らが行なっていることをそのまま、彼らが被るようにされます。蔭くものを刈り取るのです。

2B 諸国の戦い 9-17

3:9 諸国の民の間で、こう叫べ。聖戦をふれよ。勇士たちを奮い立たせよ。すべての戦士たちを集めて上らせよ。3:10 あなたがたの鋏を剣に、あなたがたのかまを槍に、打ち直せ。弱い者に「私は勇士だ。」と言わせよ。3:11 回りのすべての国々よ。急いで来て、そこに集まれ。…主よ。あなたの勇士たちを下してください。…3:12 諸国の民は起き上がり、ヨシャパテの谷に上って来い。わたしが、そこで、回りのすべての国々をさばくために、さばきの座に着くからだ。

この箇所の聖句を使って、私たちが主の戦士となり、戦いなさいというプレイズを聞いたことがあります。けれども前後関係を読めば、それは決して歌ってはならないものです。なぜなら、主が「聖戦をふれよ」と呼ばれているのは、主によって裁きを受けるためだとあるからです。これは神がご自分の主権の中で、ご自分に反抗する諸国の軍隊がエルサレムに集まって来いと挑戦しておられるところなのです。先にも申し上げましたとおり、主は、反抗する者たちの反抗をさえ用いられて、ご自分の栄光を現されます。

3:13 かまを入れよ。刈り入れの時は熟した。来て、踏め。酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪がひどいからだ。3:14 さばきの谷には、群集また群集。主の日がさばきの谷に近づくからだ。3:15 太陽も月も暗くなり、星もその光を失う。

集められた軍隊どもが、主によってことごとく滅ぼされるのを、黙示録では「収穫」として例えています。黙示録 14 章 17 節から読みます。

また、もうひとりの御使いが、天の聖所から出て来たが、この御使いも、鋭いかまを持っていた。すると、火を支配する権威を持ったもうひとりの御使いが、祭壇から出て来て、鋭いかまを持

つ御使いに大声で叫んで言った。「その鋭いかまを入れ、地のぶどうのふさを刈り集めよ。ぶどうはすでに熟しているのだから。」そこで御使いは地にかまを入れ、地のぶどうを刈り集めて、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れた。その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て、馬のくつわに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。(17-20 節)

3:16 主はシオンから叫び、エルサレムから声を出される。天も地も震える。だが、主は、その民の避け所、イスラエルの子らのとりでである。3:17 あなたがたは、わたしがあなたがたの神、主であり、わたしの聖なる山、シオンに住むことを知ろう。エルサレムは聖地となり、他国人はもう、そこを通らない。

このようにして、悔い改めたイスラエルの民に救いが与えられます。主が再臨し、聖なる山、エルサレムに座られます。これこそが、救いの姿です。主がご自分の民の間に住まわれることです。そして、他国人は二度と触れることが出来ないようにされます。キリストが私たちの間に住まれ、敵がもはや私たちを打つことはないようにする状態に、神がしてくださること、これが救いです(黙示 21 章)。

3B シオンの回復 18-21

3:18 その日、山々には甘いぶどう酒がしたり、丘々には乳が流れ、ユダのすべての谷川には水が流れ、主の宮から泉がわきいで、シティムの溪流を潤す。3:19 エジプトは荒れ果てた地となり、エドムは荒れ果てた荒野となる。彼らのユダの人々への暴虐のためだ。彼らが彼らの地で、罪のない血を流したためだ。3:20 だが、ユダは永遠に人の住む所となり、エルサレムは代々にわたって人の住む所となる。3:21 わたしは彼らの血の復讐をし、罰しないではおかない。主はシオンに住む。

キリストが地上で神の国を統治される時の至福の状態です。カナン人の地がかつて「乳と蜜の流れる地」と呼ばれましたが、その豊かさが取り戻されます。そして、ワジと呼ばれる涸れた川がユダの荒野にたくさんありますが、そこに絶えず水が流れるようになります。特に、主の宮から泉が湧き出て、シティムの渓谷を潤すというのは、エゼキエル書にも預言されている神殿から湧き出る水のことです。エゼキエルがその水かさ測っていると、始めは足のくるぶしほどであったのに、さらに下流を測るにつれて水かさが泳げるほどの水になりました。その水が二手に分かれて、西には地中海に、東には死海に流れます(47 章参照)。このシティムの溪流は、この東の死海に流れる渓谷であると考えられます。

エドムについては、イザヤ書、エレミヤ書、またエゼキエル書にも永遠の廃墟が定められていることが預言されています(例:エレミヤ 49:13)。彼らがイスラエルの民、またその土地に行なったこ

とによるためです。そしてエジプトはゼカリヤ書において、千年王国における仮庵の祭りに集わな
いために、そこに雨が降らないという預言があります。それでそのどちらも荒れ果てた地です。

そして主が彼らの間に住まわれます。シオンに住まわれます。千年王国では地上のエルサレム、
そして新天新地では天のエルサレムに住まわれます。この中に入るには、悔い改めに伴う、神の
恵み深さ、憐れみの中に立ち返る事です。